

「第66回中学生人権作文コンテスト」

大阪大会

平成30年度「中学生人権作文コンテスト」大阪大会(主催：大阪法務局、大阪府人権擁護委員連合会、後援：産経新聞社など)の表彰式が12月9日(日)、大阪市立阿倍野区民センターで開催され、最優秀賞6編と優秀賞7編が表彰されます。コンテストは、中学生に人権作文で豊かな人権感覚を身に付けてもらおうと、大阪が全国に先駆け、今回で66回目。府内186の中学校から2万4687編もの応募が寄せられた。最優秀賞のなかから、産経新聞社賞を紹介します。その他の作品については、下記ホームページに掲載される予定です。



人権イメージキャラクター
人KENまる君

産経新聞社賞

「終末期医療と尊厳死」

柏原市立柏原中学校 3年 星田 拓末

僕の祖母は昨年十二月に亡くなった。身近な人が亡くなるという経験をしたのは、そのときが初めてだった。

祖母は昨年二月に末期がんで余命半年と診断された。医師や周りの人達は祖母が高齢であるため、治療など何もせず、残りの時間を楽しく過ごした方がよいと僕達に言った。それは、「重い病気の末期で不治と判断されたとき、必要以上の延命治療を受けず、人間らしい最期を全うしよう」という終末期医療と尊厳死という考え方に基づいた助言だった。

最近では、治療法がなく、余命を宣告されたとき、尊厳死を選択するのが正しいというような風潮にあるらしい。周りの人達からそういう話を聞いたり自分で調べたりもしたが、それでも治療をしないという選択に納得がいかず、諦めきれなかった僕達家族は、三月に違う医師のところに行き、抗がん剤治療を始めることになった。しかし、副作用が強すぎて中断。そして五月には腹膜への転移があり腸閉塞となり何も食べられなくなった。食べられるようになるには手術しかなかった。しかし、祖母は手術を拒んだ。それに、手術してもあとどれくらいの間、食べられるかも分からず、合併症を起こすリスクもあった。

祖母はだんだん弱っていき以前のように笑顔を見せることも少なくなった。僕はそんな祖母の姿を見ているのが辛かった。以前のように元気に笑っている姿を見たいと思った。しかしその反面、こんなに辛い思いをして嫌がる治療をする必要があるのか、好きなことをして自由に残りの時間を楽しむことこそ、祖母のためになるのではないのかと僕は考えるようになった。

インフォームドコンセントで家族が手術を決定できない中、主治医の先生は「このまま食べられないなんて何一ついいことがない。手術しよう。」と僕達に手術を促してくれた。この結果、手術から半年以上生きる事ができた。祖母は好きなものを食べられるようになり、以前のように笑顔を見せることが増えた。僕達家族は祖母との残りの時間を有意義に過ごすことができた。

僕は一度、治療をせずに自由に過ごすことこそ祖母のためになるのではないかと考えた。しかしそれは本当に祖母のためになったのだろうか。あの時、手術をしなければ、何の治療もしなければ祖母と僕達家族の人生は大きく変わっていただろう。

終末期医療には正解がないと主治医の先生は言っていた。僕が迷った、辛くても治療をして少しでも長く生きること、治療をせずに自由に過ごすこと、どちらも正解ということだ。

祖母の病状が進み、治療はせずに痛みや苦痛をとるだけという緩和ケア病棟に入院することになった。何も食べることができず衰弱していく中、主治医の先生は「もう一度ごはんを食べられるようにしてあげたい」「もう一度家に帰らせてあげたい」「もう一度外の風に当ててあげたい」とそれらを叶えるために緩和ケア病棟でできる最大限の治療をしてくれた。祖母は苦しむことは少なく、最期まで人間らしく、精一杯生きてくれた。そして、僕達家族も後悔なく祖母とお別れすることができた。

終末期医療には正解はないが、祖母の主治医の先生のように「もう一度、もう一度」とできる限りのことを考え、明日に命を繋げていくことが大切なのではないかと思う。そして、人の尊厳とは、主治医の先生がもう一度叶えてあげたいと言った食べることであったり、家族とともに過ごすことであつたりと意外と普通のことであるのだと感じた。

祖母の主治医の先生は医師と患者としてだけではなく、一人の人として、祖母と家族に向き合い、正解がない終末期医療を僕達家族と一緒に悩み、最後まで懸命に尽くしてくれた。

僕はこの先生と出会い、将来、先生のようになり人の心と人の命を救える医師になりたいと思うようになった。先生の人として患者やその家族に寄り添う姿を見て、人として人を思いやる大切さを改めて考えるきっかけとなった。この先、どんなことがあっても、誰かのために自分が何ができるかを考え、人を思いやる心を忘れずに生きていこうと思う。